

一七世紀後半のスーラト社会について

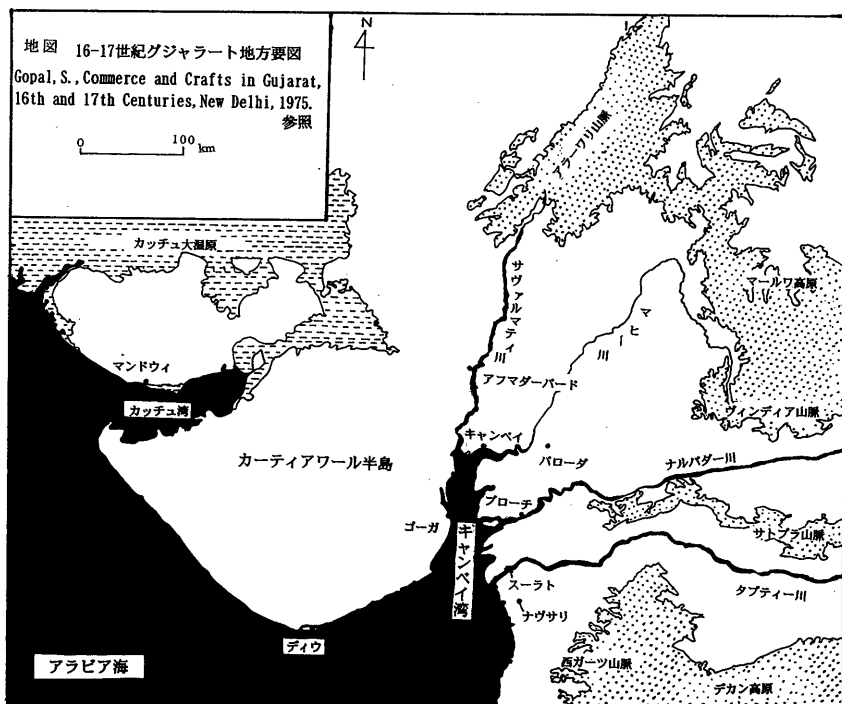
佐 原 裕 美

はじめに

ムガル朝時代のインドにおいては、都市がよく発達をした。それは、ムガル朝という統一政権のもとで、商工業の拡大が見られたことに多くを由来する。一六世紀にはすでに、アーグラなどの大都市が内陸に形成されていた。一七世紀になると、交通の要所に位置する地方都市が、人口二〇万を超える大都市として出現してきた。これらの都市は、その地方の主要都市として、行政・商業・工業のセンターとなった。スーラトもまた、一七世紀から飛躍的な発達を遂げた商業センターであった¹⁾。

スーラトが商業の拠点として台頭してきたのは、一六世紀の中頃、アフマド・シャーヒー朝の治世下のことであった。一五二二年のポルトガルによる焼き討ちのため壊滅したスーラトを、アフマド・シャーヒー朝の宰相であったマリク・ゴープイーが再建したことがその始まりである。そして、当時衰退をはじめていたキャンベイに代わる商業の拠点として内外の物資を引き寄せるようになったのである。一五七三年、アクバルによつて、この地がムガル帝国に併合されると、ムガル帝国の西の玄関口として、帝都アーグラやデリーにも比肩するほどの大都市となった。また、メッカ巡礼の搭乗港とされたことも、スーラトの繁栄に拍車をかけた。

そのような繁栄の只中にあるスーラトを訪れ、二年半の間その地で生活をし、その体験を旅行記に綴ったイギ



リス人がいた。ジョン・オーヴィングトン、その人である。彼は一六八九年にインドにわたり、イギリス東インド会社の牧師として、スーラト商館で生活した。彼の市内生活に関する観察は子細にわたり、往時のスーラト市の様子がよく表されている。そこで、彼の旅行記『一六八九年のスーラト渡航記』から、一七世紀後半のスーラト市の様子をできるだけ詳しく探ってみたい。具体的には、都市の景観、行政機構、そして住民の社会生活に関する事柄である。そうすることによって、ムガル朝期の都市の特色が少しでも明らかにされるのではないかと考えるためである。そこでまず、旅行記の著者であるオーヴィングトンがスーラトでどのような生活を送っていたのかを述べ、その後、スーラト市に関する彼の記述の検討にはいりたい。

一 オーヴィングトンのスーラト渡航記

ジョン・オーヴィングトン⁽²⁾は、一六五三年初頭、イギリス、ヨークシャー地方のメルソンビーに生まれた。生家はヨーマン・ファーマーズ（地主）階級に属す家柄であつたが、彼自身は聖職者を目指した。一六八九年四月十一日⁽³⁾、彼はチームズ川にのぞむグレーブゼンドを出航するベンジャミン号に乗船し、遙かインドの地を目指した。ベンジャミン号は東インド会社の商船であつたが、オーヴィングトン自身は東インド会社の正規の職員ではなく、船付きの牧師（チャブレン）の補充要員としての乗船であつた。ベンジャミン号は喜望峰を迂回し、アラビア海を横断して、一六九〇年五月二十九日（六月八日）にボンベイに到着した。

当時のボンベイは、イギリス東インド会社のインドにおける西部方面拠点とされ、要塞化された商館に常駐の商館員が配備されていた。しかし、その機能はいまだスーラト商館との間に分散され、ボンベイ知事（Governor of Bombay）がスーラト商館長（President）を兼任していた。オーヴィングトンはボンベイ滞在中に、ボンベイ副知事からの要請を受けてミニスターとして正式に東インド会社に雇われることになるが、このミニスターもまた、ボンベイの管轄下にある商館の宗教的な面での統轄者でありながら、スーラト商館付きの牧師（チャブレン）をも兼任していた。そのために、オーヴィングトンはインド滞在のほとんどを、スーラト商館で過ごすこととなった。オーヴィングトンのスーラトでの生活は二年半に及び、彼はその時の経験をもとに旅行記『一六八九年のスーラト渡航記』を著した。この旅行記は一六九六年にロンドンで出版され⁽⁴⁾、一七二五年にはパリでフランス語版が出版された⁽⁵⁾。また一七五八年には再度フランス語版が出版されている⁽⁶⁾。その後、一九二九年になつてH・G・ローリンソンの校訂により、オックスフォード大学出版会から新たな版が刊行された⁽⁷⁾。ここで使用する文献も、ローリンソンの校訂版である。

彼の旅行記は三〇〇ページほどのもので、内容は三部に分けられる。第一部はインドへの往路であり、マデイラ島からジョハンナ島までの記録、第二部はボンベイ、エレファンタ島、ムガル帝国、スーラトの各記録である。第三部はイギリスへの復路であり、マスカットからアセンション島までの記録である。そのなかでも特にスーラトについての記述に大部が割かれている。当時のスーラトは、ムガル朝の西の玄関口であり、物資の一大集散地として繁栄の極みを迎えていた。ペルシア湾や紅海諸都市と活発な交易を行い、またベンガル地方やマラバル海岸といったインド沿岸地域との交易も盛んであった。整備された道路網はデリーやアーグラなどの内陸の大都市とスーラトとの結合を強固なものにした。まさにスーラトはムガル朝を代表する商業センターだったのである。スーラトから得られる税収は莫大な額に上り、その税収はムガル皇帝の重要財源とされた。そして、その税収の一部はデカン地方でムガル軍を維持するためにも使われた。

一六九〇年代はアウラングゼーブ（在位一六五八―一七〇七）の治世期であり、この当時、アウラングゼーブはデカン遠征の最終局面に差し掛かっていた。この動きは、オーヴィングトンの旅行記中にも生き生きと伝えられている。

ムガル皇帝の軍隊は全勢力でもって、インド最南端の岬、コモリン岬に向かって征服活動を遂行している。その地には、まだ「ムガル皇帝からの」攻撃を受けたことのない多くの下級の王がいる。彼らを征服することに夢中になり、それがアウラングゼーブ帝の野心の対象である。⁽⁸⁾

事実、一六九〇年以後のアウラングゼーブは、カルナタカ地方の併合に専念していた。また、一六五〇年代から続くマラーター王国との抗争も、この時期新たな局面を迎えていた。その前年一六八九年に王位に即いたラージャラム（在位一六八九―一七〇〇）が、ムガル朝の攻撃をさけるために東海岸のジンジーへと避難し、その結果マラーターの抵抗が西海岸から東海岸にまで広がる結果となったのである。⁽⁹⁾この点についても、オーヴィングトン

の記録は正確である。

強大な力を持つラージャ（ラージャラム）は、いま、コロマンデル海岸への遠征のため、外地にいる。その地で彼は、新兵と金とを求める。彼は、マラバル海岸に強力な軍隊を確保している。その部隊は、わずかな間に強力な軍隊とともに原野に現われるだろうと信じられている。もしも、彼の軍事兵器が、なんの加工も施されない天然自然の武器と同じくらい大量にあれば、彼らは確実にもっと遠くまで勢力を拡げ、東洋におけるどんな有力者よりももっと彼の権威を拡張したであろう。（一一五ページ）

マラーターにとどまらず、ムガル帝国内では皇帝に対する反乱が頻発するようになっていた。オーヴィングトンは、このようなムガル帝国の動揺についても指摘をしている。

王国の一地域の征服は、しばしば、他地域の喪失になる。なぜなら、ムガル皇帝のキャンプが近くにいたときには、喜んで彼の権力に服従していたラージャも、皇帝が遠方に離れたと知るやいなや、すぐさまその関係を否定するのである。このような騒動が、ムガル皇帝に、終わりのない混乱と出費を呼び込んでいる。（一一四

～一一五ページ）

このような不穏な動きは、アウラングゼーブの死後、ムガル帝国を解体する動きへとつながっていく。しかしながら、スーラト一都市を見たとき、そのような衰退に向かう動きはいまだ見られず、前述のような繁栄の只中にあるのである。

さて、オーヴィングトンの旅行記についてフロランス・ド・スザは、「インドの人々に対する態度のなかにあらわれる彼の尊大な優越意識を除けば、オーヴィングトンの記録は、一六九〇年代のグジャラートの生活、商業、政治構造についての非常に興味深い詳細を含んでいる」と記している¹⁰。また、ミール・ナンダも、「オーヴィングトンの報告において、彼の知識、強い好奇心、忍耐力、慎重さは褒むべきものである。しかし、彼の党派心、宗教的

な偏見、文体の回りくどさにはまた、注意が必要である」と述べている。⁽¹¹⁾ 両者ともに、オーヴィングトンの偏見を指摘している。オーヴィングトンに限らず、一般に当時の旅行記には知識の偏向や誤謬が往々にして散見されるものである。しかしながら、オーヴィングトンの細かな観察や客観的な報告は、そのような欠点にも関わらず、当時を知る第一級の資料といえるだろう。

オーヴィングトンのスーラトについての記述を検討する前に、オーヴィングトン自身について、もう少し検討を加えたい。前述のように、オーヴィングトンは一六九〇年五月二十九日にボンベイに到達した。オーヴィングトンのボンベイ滞在は、この日から一〇月終わりまでの四カ月間であった。この時期は、ちょうど雨期にあたり、オーヴィングトンの抱くボンベイの印象もひどいものとなった。雨期がおり、九月中旬によくスーラト出発の許可が降りると、オーヴィングトンは、その喜びを次のように記した。

わたしたちは雨期の初めにここ（ボンベイ）に到着した。そして、二〇人以上の乗客と、一五人以上の船員がいたが、そのうちの二四人を埋葬した。わたしたちは「スーラト出航の許可を受けた」翌月の一〇月終わりまでこの地にとどまり、その間、生き残った人々は、迫り来る死の恐怖と戦っていた。そして、スーラト河口に向けて船が出発するという慈悲深い天祐のおかげで、この恐怖から逃れられることとなった。なんと幸運な逃避であつたらうか！ 司令官もわたし自身も、これ以上生き延びる望みが持てなかったのだから。最高の薬である酒も、もつとも体によい処方も、次第に衰えていく体力を回復することはできなかった。つい最近離れたばかりのその土地の不健康さをわたしたちが確信したのは、スーラトへの行程が半分ほど来たときで、突然病気から解放され、健康が取り戻されたのだ。航海の途中で空気がよくなった証として、わたしたちの体に確認できた変化とは、味覚がワインと水の味を区別できるようになったことである。（八六ページ）

ベンジャミン号はスーラトへ向かう航海の途中、サンガリア族の海賊に襲われながらも、スーラトの外港である

スワーリーに到着した。この土地は、オーヴィングトンが「初めて足を踏み入れたムガル皇帝に属する土地」(一〇一ページ)であった。ベンジャミン号はこの土地で荷を陸揚げすると、東南アジアのアチン、マラッカ方面の航海へと出発した。オーヴィングトンは前述のように、ベンジャミン号のこの航海には同行せず、スーラト商館へと向かった。

スーラト商館内におけるオーヴィングトンの地位は、「商館の中で三番目」(二二八ページ)であった。彼の説明によれば、医者や外科医が商館員の身体面での世話をするのと同様に、ミニスターは、精神生活面での世話を受け持ったのだという。また、ミニスターは、非常に恵まれた地位であり、且つ尊敬される地位でもあったという。

ミニスターのために年一〇〇ポンドの固定給が約束され、それに加えて、食事や快適な居住施設、執務室で彼の世話をする一人の従者、必要と思うときにはいつでも使える馬車、ないし馬の御者が、彼のために認められている。各船の船長や船主から送られる私的な贈り物の他に、寄付や、彼らが寄港地で手に入れたさまざまな珍品を受け取らないときはない。また、ミニスターは絶えず、結婚式、洗礼式、葬式を挙行するため、高価で多額の祝儀を受け取っている。彼の生活を快適にしたり、彼の仕事を尊敬すべきものとするために事欠くものはなにもない。彼は、俗世間的な振る舞いを差し控えるようにいわれ、商館内では第二の地位につぐ席次を与えられる。このような人物であるミニスターにとつては、実に前述したようなことが常時行なうべき義務のすべてであつたので、もし彼が「イギリスの」州の「宗教上の」最高権威者、あるいはインドの大主教であつたとしても、これ以上の尊敬を得ることはできなかったであろう。(二三四—二三五ページ)

ミニスターの職務については、彼は次のように説明している。

ミニスターは、日曜日に公共演説を一度、公共礼拝を三度行ない、平日には教会で朝晩のお祈りを読み上げねばならない。朝というのは、商館員が仕事に出る前の朝六時であり、晩というのは、皆が仕事を終える夜八時

である。彼は、若者全員に対して教理問答を行なう。マラバル海岸やカールワール、カリカット、ルツテラなどの「ボンベイ要塞の管轄下にある」従属商館にも訪れ、ミニスターが不在であるときの礼拝式の執行について指示を与える。(二三五ページ)

ここに見える祈禱の際のことばの全文が、旅行記中に記されている。それは「ミニスターの配慮や教えが、イギリス人の間での自堕落や従順でない態度の改善に効果が上がるようにしないわけにはいかないのだ」(二三七ページ)東インド会社が權威を与えることによってつくられた三種のことばであった。一つは、会社からの命令と訓令のことばであり、二つめは、日曜日や公的・私的な祈禱の遵守を求める規範のことばであり、三つめは、会社にも会社の従業員にも、たえず彼らの身分に応じた神の恩典を授かり、彼ら全員に祝福があるように、毎日唱える祈禱のことばである。校訂者であるローリンソンによれば、これらのことばの作成に、オーヴィングトンは関わっていたという。

オーヴィングトンの日々の職場は、商館内の教会であった。

祈りの場である教会は商館の中にあり、整然として厳肅であるように、まずまずに装飾されている。その内部には、ムスリムの不快を招くものをすべて避けるために、どんな生きものの姿も見られない。ムスリムは、我々の礼拝が無知であるといって大層うれしがるからである。(二三五ページ)

オーヴィングトンはこのような生活をしながら、スーラト市に暮らした。そして、一六九三年二月、マラッカから帰港したベンジャミン号に再び乗り込むと、彼はインドを後にした。グレーヴゼンドに帰りつくのは、それから一〇カ月後のことであった。スーラトでの勤務ぶりを高く評価されたオーヴィングトンは、再びインドに戻ることを東インド会社から要請され、彼自身もそれを望んでいたようだが、結局それが実現することはなかった。彼は旅行記の執筆に取りかかり、すでに述べたとおり、一六九六年、一冊の本として出版されることとなったのである。

その後の彼は、牧師として順調な生涯を過ごし、一七三一年の六月に七八年の生涯を終えている。それでは、次にオーヴィングトンの報告する、一七世紀後半のスーラト社会について検討してみることしよう。

二 スーラト市の状況

スーラト市は、キャンベイ湾の入り口近くに注ぎこむタブティー川の南岸に発達した。タブティー川の源は、デカン高原の北端に位置するマハーデオ丘陵であり、全長三〇〇キロメートル以上にも及ぶ。タブティー川は西流し、スーラトから大きく蛇行して、ここからさらに二〇キロメートルの距離を流れて、アラビア海へゆつくりと注ぎこむ。スーラト市は、川の流れの屈曲部に位置していたため、町の半分が川に接し、半円形の形状をしていた。

オーヴィングトンが訪れた当時の市街の拡がりには、郊外の住宅地区をも含めて二・三マイル（三・二・四・八キロメートル）（二二九ページ）であつたという。ここに郊外の存在が指摘されているように、この当時、市内と市外の区別がみられた。その境となつたのが市壁である。オーヴィングトンによれば、当時スーラト市は「防禦壁で防備が固められていて、一定の間隔で塔や銃眼を備えた胸壁と接して」（二二九ページ）いた。そして、その建造の目的は、「敵軍による頻繁な襲撃」に備えるためであつた。すなわち、この市壁は、一六六四年のシヴァージーによるスーラト襲撃直後に、マラーター対策として建造されたものである。アレクサンダー・ハミルトン^①は、その間の経緯や、その後の人口の増加について詳しい記録を伝えている。

：けれども彼（シヴァージー）は、とてつもなく巨額な戦利品を持ち帰った。そのため、住民たちは、将来に備えて町のまわりを防禦壁で囲むことによって自分たちを保護してくれるよう、アウラングゼーブ帝に求めた。彼はその願いを聞き入れ、四マイルほどの防禦壁をつくって街を囲ませた。しかし、貿易は増大し、商業活動を行なうために街にやってくる人々を受け入れるには、防禦壁の中の町はあまりにも小さかった。そのため、

織工たちの便宜のために大きな郊外地区がいくつか街に加えられた。⁽¹³⁾

この記録により、市内と市外の境が、やはり市壁に置かれていたことが確認できる。それとともに、市内だけでは増加する人口を受け入れることができず、市壁の外に街が拡張しつづつあったことも認められる。ところで市域の広さについて、オーヴィングトンとハミルトンとの間に若干の相違が見られる。ジャナキーが描いたスーラト市内地図を見てみると、⁽¹⁴⁾ ほぼハミルトンの見積もりに一致するようである。これにより、当時のスーラト市が東西六・四キロメートルほどの拡がりを持っていたとすることができよう。

市壁には、市内から各地に通じる道路のために市門が置かれていた。オーヴィングトンによれば、「街の「陸上の」入り口は、六つもしくは七つの門であり、そこには常時番兵が立つて、街に出入りするすべての人々に対し、ほんのわずかな嫌疑についてさえも弁明を求め」ていたという⁽¹⁵⁾ (二三〇ページ)。また、街への入り口は陸上だけではなく、水上にも置かれていた。それが、タブティー川に設置された五つの船着場であった。⁽¹⁶⁾

さて、オーヴィングトンは市壁について、前述のように、敵襲に備えて建造されたものであるといっている。しかしながら、「その最大の兵力は城内に置かれていた」と記している。スーラト城について、オーヴィングトンは次のように説明している。

「スーラト」城は、街の南西方向に向かって建てられている。一方には城を防衛する川が流れ、もう一方には掘割が掘られている。城は正方形で、それぞれの角は大きな塔で防備が固められている。さまざまな宿所があり、知事が生活するために必要なあらゆる必需品が備えられている。そして、城壁の上には整備された何門かの大砲がある。(二二九ページ)

ここに現われる知事とは、城の司令官と呼ばれるキラダール (Qiladar) のことである。城壁の外には決して出ることがなく、常に城の中に居続けたということから、オーヴィングトンは彼のことを「囚人」のようだと記してい

る（一三一ページ）。キラダールは軍を統轄する軍事長官であり、軍隊も城内に駐屯させていた。

スーラト城の立地する地区は、城の他にも造幣局や税関が立ち並び、行政・商業の中心地区であった。その地区の中心となる広場は、当時のイギリス人がキャッスル・グリーンと呼んだ特別な広場であった。

町の中心には、城に近接していることからキャッスル・グリーンと呼ばれる特別な広場がある。そこでは、モンスーンの時期を除いて、昼も夜も露天にあらゆる商品が並んでいる。そしてそこでは、イギリス人もフランス人もオランダ人も、現地の人々とともに貨物を置いて、船荷としてそれらを支度する。（二三〇ページ）
そのために、タブティー川の水面にはたくさんの船が往来していた。

「タブティー」川は、外国の商品の輸入のための十分な広さがある。外国商品は、とても便利であり且つ迅速であるホイ（一本マストの小型帆船）やヨット、その地方の船によって街へと運ばれる。そして、ヨーロッパのみならず、中国、ペルシア、アラビアやインドの遠隔地からも船が訪れ、あらゆる種類の商品を陸揚げして、港を豊かにし街を飾り立てる。（二三一ページ）

また、市内の通りについても、あふれるほどの商品と人込みによって賑わっていたことが記されている。

適度な道幅のところは少なくはないが、通りは総じてかなり狭い。夕方ともなれば、とりわけバーザール、すなわち市場の周辺では、ロンドン中のどんな場所よりもっと込みあっている。あまりに混雑しているので、商品を陳列するバニヤ商人やその他の商人の集団の間を通り抜けることは容易なことではない。ここでは、商人は彼らの手や頭上に絹や織物を持って立ち、道行く人の注意を引いている。（二三〇ページ）

これらの記録は、スーラトにおける活発な商業活動を証明するものであり、この時期にどれだけ多くの人々がスーラトに居住していたかを物語るものである。スーラトの人口について正確な数字は知られていないが、先に引用したハミルトンの記録には、一八世紀初頭のスーラト市の人口は二〇万人ほどであった、と記されている。¹⁷

すでにこれらの記述から明らかなように、この当時のスーラトは国際的な交易都市として、各地から物資や人々を引き寄せていた。その国際的な性格をオーヴィングトン¹⁸は、「物資は、首都のアーグラやデリー、ブローチ、アマダバードその他特産の商品で知られる都市からスーラトに運ばれる。そしてこの地で、ヨーロッパ人やトルコ人、アラビア人、ペルシア人、アルメニア人に大量に売り付けられる」（二三三ページ）と記している。このように、人々がスーラトに引き寄せられた理由は、スーラトが当時最大の商業都市であり、そのためにスーラトに見られる商品が多様であつたこと、とりわけヨーロッパ人にとっては物珍しい商品が安価で大量に得られるということがあつた。オーヴィングトンの次の一文は、そのことを指摘するものである。

スーラトは、インド帝国のもつとも有名な商業中心地として知られる。ここでは、いままでに見たこともないような、あらゆる商品が売られている。それらの商品の物珍しさは、購入した商品でさらなる利益を得ようという買手の期待に十分添うものである。また、「購入した商品を売るときには」その買手がそうであつたように、投機をするそれらの商品の珍しさが、さらに他の買手を引き付けるのである。（二三一ページ）

具体的に、その地で取引される商品についてもオーヴィングトンの記録は詳細である。

ここは、アトラスのような高価な絹、クッタニー、スーシー、カルガー、アラジャール、ヴィロード、タツファティーやサテンのアジア中との取引で知られている。また、ペルシアからのザルバフト、及びペルシア湾からここにたくさん運ばれてくる真珠の取引によつても有名である。しかし、同様にしてダイヤモンドやルビー、サファイア、トパーズ、そしてまた他の輝石や貴石の取引もあり、大量にここで売られている。瑪瑙、紅玉髓、ニッサニー、机、スクリューター、小綺麗に研かれ裝飾された箱の取引もあり、それらはここでとても手ごろな値段で購入される。¹⁹（二三二ページ）

これらの貿易品は一六世紀から変化なく取引されているものである。¹⁹また、とりわけヨーロッパ諸国との間には貴

金属の取引が行なわれ、オーヴィングトンもスーラトの金銀が非常に良質なものであること、輸出入の際には関税として二・五%がムガル朝の役人に支払われたこと、外国の貨幣がムガル朝の役人に渡るとすぐに溶かされ、ルピーにかえられてしまうことなどが記されている。⁽²⁰⁾（二三二ページ）

さて、この国際的なスーラト市には、人々を受け入れるための様々な居住施設が見られた。当時、ヨーロッパからスーラトに訪れていたイギリス人やオランダ人などは、市内に商館を開き、そこに社員が常駐し、商業活動を行なった。それに対して、アジア各地からスーラトを訪れる人々は、キヤラバン・サライに宿泊した。オーヴィングトンは、「街の中央には、広々とした見事なキヤラバン・サライ、すなわち宿舎がある。他地方の出身者で、交易をするためにこの地に滞在する商人の便宜をはかるためである。彼らはそこで、申し分のない夜を過ごす」と記している。また、この施設が「市内で唯一の公共施設」であったとも述べている。（二八四ページ）

一方、スーラト市の住民、とりわけ市内に住むような人々は、次のような家に住んでいた。

住宅は、住民の富に不釣り合いであるけれども、その多くはまずまずで堂々としている。彼らは常に自分の富裕さを隠そうとしているので、調度品も豪華なものではない。それは、ムガル皇帝の強欲を刺激しすぎてはいけなからである。それらの住宅は、屋根が平らであり、もつと正確にいえばわずかにゆるく勾配している。スペインやポルトガルの住宅のように瓦が葺かれ、壁は煉瓦あるいは石でつくられる。窓にはガラスがなく、新鮮な空気の取り入れに便利のように開かれたままである。一階と二階のどちらの床も、すべてテラスで囲まれている、部屋の中を涼しくしている。（二三〇ページ）

郊外に住む人々の家は、もつと粗末なものであった。

しかしながら、貧しい人々や、町外れに住むような人々はもつとみすばらしい暮らしをしている。家の壁は一フィート間隔で渡された竹で、その竹の間を葦で編みであるだけのものである。屋根は、カジャン（Cajan）、

すなわち椰子の葉だけで葺かれている。そのために、これらの家はカジャン・ハウスという俗称が付けられている。(二三〇ページ)

この記述は、スーラト市において貧富の差が歴然として存在し、繁栄の富もあらゆる人々を潤すものではなかった、ということを実に示すものである。このように様々な人種、様々な階層の人々が集まることにより、スーラト市内にはしばしば騒動や口論が引き起こされがちであった。しかし、それもまれなことであった、とオーヴィングトンは記している。(二三八ページ)

一七世紀後半のスーラト市は、以上のように、商業活動が活発に行なわれ、人の往来も激しく、活気ある様子をみせていた。しかも、そのような状況にあつてさえ、オーヴィングトンにしてみれば、治安のよい街という印象が残された。そこで次に節を改めて、秩序の維持に関係した当時のスーラト市の行政機構について、オーヴィングトンの記述から検討を加えてみたい。

三 スーラト市の行政機構

スーラト市の行政はムスリムが担っていた、とオーヴィングトンは記している。なぜならば、イスラム教は皇帝の信仰する宗教であるためで、そのためにムスリムは州総督や行政官はもちろん軍隊をも任せられる、としている。それに対して、ヒンドゥー教徒の多くは手工業や商業活動に従事しており、信用ある地位に昇るものはほとんどいない、とされる。(二四〇ページ)

スーラト市は、グジャラート州九県のうちの一つ、スーラト県の中心都市であり、本来ならば、州都であるアフマダバードに駐在する州総督の監督下に置かれるものである。しかし、スーラトからあがる関税収入の重要性は、この都市をムガル皇帝の直轄領とした。具体的には、城の司令官として軍隊を監督した先述のキラダール、関税を

はじめとする税の徴収権を持つ県知事（ムタサッディー、mutasaddi）の両者が、州総督ではなく、皇帝から直接任命されたのである。²²

キラダールについて、オーヴィングトンは次のように記している。

城の知事（キラダール）は、ムガル皇帝によつて任命される。彼の権威が三年間よりも長く及ぶことはほとんどない。在任中、彼は、高位の指揮官であるという体面を保つため、また城壁の外に決して出ては行けないという厳格な決まりごとのために、実際は囚人なのである。しかし、彼は敵の出現や奇襲に備えて常に警戒しつづけ、四六時中職務から離れることができない。（二三〇—三三一ページ）

アシン・ダス・グプタによれば、一七〇一年に城の駐屯兵の定数は四〇〇人であり、その実戦兵力は二〇〇人以下にすぎなかった。残りの二〇〇人については、町中で生活をし、服屋や靴屋として糊口をしのいでいたという。²³

ムタサッディーは税収を担当し、街の統治にあたつた。

スーラト城の知事―彼はいつでも城のなかに閉じこめられている囚人であるが―の他に、街にはもう一人の知事（ムタサッディー）がいる。あらゆる民事的な事柄が、彼の管理と保護とに委託される。彼は主だった商人や名士たちから請願を受け取り、そしてまた住民からの重要な申請書も、すべて彼に渡される。彼は大抵、スーラト市内に常駐して、皇帝から命じられた業務を遂行したり、人々に保護を加える。（二三六ページ）

ムタサッディーの常駐する建物は、キャッスル・グリーンを挟んで城の向かい側に建っていたダルバール（Darbar）であつた。ムタサッディーは、関税等の監督者を任命、解任する権利を持ち、また造幣局の監督者をも任命することができた。このことが、ムタサッディーの権力基盤となつていた。²⁴ また、ムタサッディーは、キラダールのように城内に留まり続けることはなく、象の背中に乗りながら街中を視察し、その権威を十分に示すことができた。ムタサッディーは、このように街の統治者として大きな権限を持っていたが、あらゆる事柄を独断で遂行できるわけ

ではなかった。

彼（ムタサッディー）は、重要な問題を扱うときに独断的な調停はしないで、彼の前にどんな重大な事件がもたらされようとも、街の他の役人であるコーギー（Cogy）やヴァカナヴィーシュ（Vacanavish）、コトワール（Cotwal）の協議や同意なしには、めったにそれを裁定することはない。（一二六～一二七ページ）

コーギーは、すなわちカーディー（qadi）のことであり、イスラム法に基づき民事・刑事の訴訟に判決を下す裁判官である。オートヴィングトンは、「コーギーは、都市の法律（Municipal Laws）に熟知した人々であり、裁判官として行動する。また、帝国の市民習慣に関する事柄を相談される」（一二七ページ）と記している。

ヴァカナヴィーシュは、すなわちワーキア・ナウイス（wāqī'a-nawis）のことである。ワーキア・ナウイスは、事実を記す人を意味している。

ヴァカナヴィーシュは、ムガル皇帝の公的な情報提供者であり、スーラトで起こった正確で重要なあらゆる事件「の情報」について、インドの宮廷に毎週一回報告をするために雇われている。（一二七ページ）

また、ワーキア・ナウイスに類似した役人として、ハルカラ（Harkara）という役人がいた。

彼（ワーキア・ナウイス）の次には、やや彼に類似したハルカラ（Harcarrah）と呼ばれるもう一人の役人がある。彼は、真実であろうと間違ひであろうと、あらゆる情報に耳を傾け、重要であろうとなかろうと、起こった出来事のすべてに聞き耳をたてる。そして、それについて行なわれ、話されたことの何もかもをムガル皇帝に報告する。（一二七ページ）

ハルカラはスパイに違いないけれども、彼の報告は穏やかな調子のものであり、それによって傷つけられる人はいない、ともオートヴィングトンは記している。

コトワールは、市内における法と秩序の番人であった。

コトワールは、街のもう一人の役人である。やや、治安判事に類似し、市中でのあらゆる重大犯罪の抑圧に努力する。そのため、彼は不正行為を防止しようと、夜の九時、一二時、三時の三回、規則正しく朝の五時まで通りを練り歩く。朝五時になると太鼓が叩かれ、大きく長い銅のトランペットが、高々と吹き鳴らされる。

(一三七ページ)

コトワールは、剣や槍、弓矢で武装した戦士や従者を連れ歩き、犯罪者を取り締まった。軽犯罪者に対しては、短期の抑留を課すのみであったが、重犯罪者に対しては、鞭打ちの刑が行なわれた。しかし、実際には、しばしばコトワール自身がこそ泥まがいの行動を行なっていたという。⁽²⁴⁾

これらの役人により、ムタサッディーは監視され、権限を制約された。このことは、アクバルによる行政機構の編成の原則、すなわち種々の官庁がたがいに権力を分割し、抑制と均衡をはかる、というものに由来していると考えられる。⁽²⁵⁾ しかしながら、キラダールの短期解任やコトワールの腐敗行為など、アクバルの原則が徐々に崩壊に向かいつつあることもこれらの記述から認められる。それでもなお、その原則が完全に崩壊するには至らず、オーヴィングトンが認識できるほどに、その機能を保っていたことも窺えよう。

この他の地方役人の存在もオーヴィングトンによって報告されている。それは、街の近隣や街道の巡察を担当したファウジュダール (faujdar) である。

たとえどんな盗みや掠奪がその地方で行なわれようとも、もう一人の役人であるフォウルスダール (Fouls-dar) がその対応にあたる。彼は、戦士と従者を連れ歩くことが許されている。それは、彼はその地方をあちこちに移動するし、また盗賊を捜し出して幹線道を警護し、危険が予想される諸地域の平穏と安全を旅行者のために維持するからである。⁽²⁶⁾ (一三九ページ)

オーヴィングトンによって報告されるこれらの役人は、市内での生活に特に関わりの深かった役人たちであった、

と考えられる。そのため、港の業務を担当していたシャー・バンドル (shah bandar) やミリー・バハル (mir-i bahr) のような、聖職者であるオーヴィングトンには関わりの薄い役職の人々は記述されなかったものと考えられる。アシン・ダス・グプタの報告によれば、スーラト行政に携わっていた役人の数の総計は、二、三、〇〇〇を越えることはなく、「役人のヒエラルキーは、複合体であつたにもかかわらず、大きなものではなかつた」という。⁽²⁷⁾

四 住民生活の諸相

スーラト市の住民が、イスラム教徒、ヒンドゥー教徒、パールシー (ゾロアスター) 教徒から構成されていたというのは、すでによく知られていることである。オーヴィングトンも次のように記している。

ここに住む現地の住民を三種に区分して述べることにする。一つめはムーア人 (Moors)、すなわちモグル人 (Moguls) である。二つめはバニヤ (Bannians)、すなわち古来の異教徒 (Ancient Gentiles) である。三つめはパールシー (Parsies)、すなわちガウル (Gaures) である。⁽²⁸⁾ (一三九ページ)

オーヴィングトンは、これらの住民の社会生活や慣習をよく観察し、また信仰や宗教儀式に関する興味深い記述を残している。ここでは特に住民の日常生活に的を絞って、その諸側面の一端を具体的に紹介していくこととしたい。そのためにも、まず貨幣の価値についてのオーヴィングトンの記述を挙げておこう。

金貨、すなわち金のルピー貨は、通常一四銀ルピー貨の価値である。銀ルピー貨は、二シリング三ペンスである。これらの貨幣以外にも、外国貨幣が流通しているが、たくさんではない。銅でできたパイサ貨は、時には二、三枚の多少があるけれども、六〇枚で一ルピーの価値である。さらに低額の貨幣として、この地ではビター・アーモンドが流通している。それは、六〇粒で一パイサである。(一三二ページ)

では、住民が一日に使う必要費用は、如何程であつたのだろうか。オーヴィングトンは、スーラト市内に住む、

ある貧しい女性の例を挙げている。それによると、彼女の一日に必要な金額は、二〜三パイサで十分であったようだ。貧しい人々の食事には、ハープ（食用、薬用になる植物）が一般によく使用されたが、それはスーラト市に豊富に見られたし、とても安価であったためだという。このハープ類は、低賃金で働く日雇い労働者にも重宝がられた。また、安い床屋であれば、「髭を剃り、髪を切り、耳掃除をし、爪を切り、それらすべてで一パイサか二パイサ」であった（一八九ページ）。また、ヤシ酒一クオート（〇・九五リットル）で、一パイサか二パイサであった（一四二ページ）。

イギリス商館には、東インド会社の業務を手助けしたり、商館長や会計係、書記といった人々の身の回りの世話をするために、従者（Peons）として雇われた人々がいた。彼らは常に四〇〜五〇名ほどが雇われていて、その毎月の賃金は一人四ルピーであり、従者長は六ルピーであった。（二二九ページ）

それに対して、「現世利益と蓄財」に魅了されているバニヤ商人は、はるかに豊かな生活を送り、貯えも十分にあった。彼らは、「ラック（Lack 一〇万）ルピーもの金額をそっくり用意できるにもかかわらず、一パイサを得るのにも躍起になった」というほどに、財を成すのに熱心であり、そのために彼らの中には一〇万ポンドにも及ぶ財産を持つものもあったという（一六四〜一六五ページ）。また、バニヤ商人の中には、ブローカーとして、商品の購入と有利な売却を行なうために、イギリス商館に雇われていたものもいた。彼らの手数料と世話代として、利益の三％が認められていた。その中には、一五〇万ルピーの貯えのあるものもいたし、三〇〇万ルピーもの財産を貯えていたものもいた。にもかかわらず彼らは出費を抑えることに熱心で、年に三、〇〇〇〜四、〇〇〇ルピーの節約を行なっていた。そのために、贅沢な装飾品や食事、住宅はどこにも見られない、とオーヴィングトン（一八八ページ）は記している（一八八ページ）。しかしながら、女性の装飾品やドレス、宝石の購入には、彼らは多くの出費を費やしたようである。彼女たちは、派手な衣服を好み、頭の前から爪先まで、すべて装飾品に飾られていた、とオーヴィング

トンはいう。(二八七ページ)

住民が一般的に着ていた衣服は、白キヤリコのカバヤ (Caba's) と呼ばれるものであった。⁽²⁹⁾ オーヴィングトンによれば「それは、わたしたちのフロック (礼服) にも似た外衣」であった。また頭にはパグリー (Pugarie) と呼ばれる白いターバンを巻き付けていた。そのために、遠くから見ると真つ白な姿に見えたという。さらに、彼らのズボンは踵まであり、金や銀、絹で美しく装飾された靴を素足で履いていた、という。(二八五ページ)

さて、貧しい人々の食事にはハーブがよく使用されると先に紹介したが、ではその他の食事はどのようなものが摂られていたのだろうか。ごく普通に食べられていたのは、キチェリー (Kitcherie) と呼ばれる料理であった。

それは、ダール (Dahl) という小さな丸い豆と米を一緒に煮込んだものであり、味はあまりよくなかったが、とても元気の湧く食べ物であった、とオーヴィングトンはいう。それゆえに、ヨーロッパの船員たちは、一週間に一度か二度、肉を摂ることを禁じられ、このキチェリーを食べることを強制される日があった。彼らはそれをバナヤの日と呼んで、非常に嫌っていたという。ダヒー (Dahi 凝乳) もまた、一般的な食事であった。それは正午頃に食べられる、どろどろの甘い牛乳であり、米と砂糖が入っている。この食事は、赤痢や熱病などに対して、たいへん有効であったとオーヴィングトンはしている (二八二―二八三ページ)。ムスリムの食事として一般的であったのは、ピラウ (Pilau) であった。それは、クロープやシナモンなどの香辛料を豊富に使った米料理で、牛肉もしくは鳥肉が入れられていた。ただし、この料理を食べられるのは、財産のある家庭に限られていたとオーヴィングトンはしている (一四〇―一四一ページ)。一日二食の食事の時間は季節によって変更されるが、朝は八時か九時に、昼は四時か五時頃に摂られるのが一般的であった (二八四ページ)。

また、果物も豊富であった。ブドウは二月中旬から三月の終わりまで、スーラトに出回っていた。それはアフマダバードや、ナヴァプル (Navapur) と呼ばれるスーラトから四日ほどの行程の小さな村からもたらされる。カ

スタード・アップルとイギリス人が呼んだパイナップル、インドでもっとも普通に見られるマンゴー、キュウリ、スイカも市内にはたくさん見られた。マスクメロンはアフマダバードから運ばれ、香りも味も世界中のあらゆるものの中で一番だとオーヴィングトンは絶賛している（一七九一—一八〇ページ）。

飲み物としては、コーヒーと紅茶が一般的であった。コーヒーは、血をきれいにし、消化を助け、精神を活気づけるとオーヴィングトンはその効用を記している。コーヒーは、アラビアのモカから運ばれてきた。オーヴィングトンが非常に気に入ったのが、紅茶である。それは、中国からもたらされた。「数種の刺激性のある香辛料を加えられ、水で煮出された紅茶は、頭痛、尿砂、腹痛に効くと評判であり、インドでは氷砂糖や、時には少量な砂糖漬のレモンとともに飲まれるのが普通である」とオーヴィングトンは記して、その効用を褒めたたえている。「この温かい飲み物が飲まれるには、熱すぎる気候が不適当であり、不快だと思われるかもしれない。それでもなお、わたしたちは、それがとても健康によく、体の習慣に合致したものであると知るのである。」（一八〇ページ）この当時、イギリスには、まだ喫茶の習慣が定着していなかった。紅茶を楽しむようになるのは、一八世紀に入ってからのものであり、それにはこのオーヴィングトンの尽力が欠かせなかったのである³⁰。なぜならば、この当時のイギリス人は、紅茶に対して偏見を持ち、有害なものだとみなしていたからである（一八二ページ）。

その他の飲み物としては、様々な種類の酒類がみられた。ダチュラ（Datura）と水を混ぜ合わせた飲み物は、イギリス人にも沈鬱な気分を紛らわすために飲まれた飲み物である。ダチュラはサンザシの実であり、気分を高揚させるある種の麻薬であった。アラク（Arak）もよく知られた酒である。オーヴィングトンはこの酒の名称の由来をアラビア語に求め、それが「甘い」を意味する語であり、隠喩として「精」を意味している、と解いているが、この見解は正しいものであった³¹。アラクはインドではゴアとベンガルの両地域でつくられたものが有名であり、ベンガル産がより強いものであった、という。また、バタヴィア産のアラクも見られた。ヨーロッパ人は、これらの

アラク酒を用いてアラク・パンチを作つて楽しんだ。このアラクは、米から蒸留され、時にはトディー (Toddy、ココヤシの実) と呼ばれるヤシ酒を指すこともあった。トディーは、先述したように、一クオート、一〜二パイサであり、麦芽酒の作られないインドにあつて、ヨーロッパ人がビール代わりに飲んだ酒であつた。さらに強い酒として知られるのは、ジャグリー・アラク (Jagre Arak) である。ジャグリーとは黒砂糖のことで、これと水を混ぜたものにバーブールの木 (Baboul、アラビアゴムモドキ) の樹液を加え、蒸留したものである。ヨーロッパ人は、これを温めてブランデー代わりに飲んでゐたという。また、グジャラートではニール (Neel) と呼ばれる酒もあつた。これは、アレカヤシ (檳榔子) の樹液から蒸留される酒で、ミルクのように甘くておいしい、という。これらの酒類を飲むのは、ムスリムが主であつたようである (一四一〜一四三ページ)。

これらの日常生活に関する一連の記述からは、当時の住民が豊富な食料に恵まれ、各地から様々な食料品が運ばれてきてゐたことを知ることができる。衣食は満たされた生活であつたが、その中に貧富の格差が厳しく現われてゐたことも、看過されてはならない。生活水準は、この格差によってかなり異なるものであつた。しかしながら、全体的に見ればスーラト市の生活は、社会的に下層の住民であつても十分生活の可能な、かなり恵まれたものであつたということができよう。このことは、当時のスーラト市がなお発展の只中にあり、今後のさらなる発展を予測させるものであつたことを示している。

おわりに

以上、本稿では、オーヴィングトンに記したスーラト市に関する記述から、当時のスーラト市の景観、行政機構、住民生活の一端を検討した。それにより、当時のスーラト市では、商工業が活発に行なわれ、人口の増加途上であり、それにもなつて市域が拡大してゐたということが確認された。そして、行政に関しては、アクバルの編成し

た行政機構がいまだその力を失わずに機能していたことも確認された。また、住民の生活においては、貧富の格差が認められるものの、衣食は満たされ、住民同士の騒動もほとんど起こっていなかったことが確認された。ここで検討した諸事例の限りにおいては、一七世紀後半のスーラト市が、ムガル朝に差し込む不穏な影にも関わらず、一八世紀に向けてなお発展の道を歩みつつあった、と理解していいように思われる。

しかしながら、このことはオーヴィングトンの記録に即してこそいえることであり、今後は他の諸史料から実情をさらに確認していく作業が必要になるであろう。また、オーヴィングトンは聖職者であり、そのことからスーラト市の住民の信仰に対しても、強い関心と深い理解を見せている。それらの記述から、住民の信仰に基づく日々の生活の実態を明らかにしていくことも、求められる作業であろう。

オーヴィングトンの記録の中には、住民同士の相互の対立というものは見当らない。しかしながら、気になる一文もある。それは、アウラングゼーブによるヒンドゥー寺院の破壊とヒンドゥー儀礼の禁止の命令に言及した記述である（一七三三ページ）。この命令が、スーラト市内の住民の間に、どのような変化を生じさせたのかは、現時点ではよくわからない。しかし、それから一世紀後の一八世紀末、スーラト市内の宗派コミュニティの間で、コミュニティな衝突が相次いだ、ということが報告されている。⁽²⁾一七世紀後半には見られなかったそのような衝突が、なぜはじまったのか。その一世紀間の間に、スーラト市にどのような変化が訪れたのか。こうしたことも念頭に置きながら、今後の研究を進めていきたい。

注

(1) サティーシュ・チャンドラ（小名康之・長島弘訳）

『中世インドの歴史』山川出版社、一九九九年、三三二

～三三三ページ。

(2) オーヴィングトンの経歴については、近藤治「イギリ

ス人のインドへの旅―オーヴィングトンのスーラト訪問と喫茶擁護論―」追手門学院大学東洋文化研究会編『旅の文化史』寝々堂出版、一九九三年を参照のこと。この

- 論文では、オーヴィン・ブントンのもう一つの著書である『茶の属性と特質に関する小論』が全訳されている。
- (3) 当時のイギリスはユリウス暦を採用していた。現在のグレゴリオ暦に置き換えれば、同年四月二二日になる。以後、本文中括弧内の日付はグレゴリオ暦に置き換えたもの。
- (4) John Ovington, *A Voyage to Surat in the Year 1689, giving a large account of that city and its inhabitants and of the English factory there*, London: Jacob Tons, 1696.
- (5) J. P. Nicéron (tr.), *Voyages faits à Surate et en d'autres lieux de l'Asie et de l'Afrique depuis 1689 jusqu'en 1693*, Paris, 1725.
- (6) *Voyage aux Indes Orientales par Jean-Henri Grose*, Traduit de l'Anglois par M. Hernandez, Londres, Lille, et Paris, 1758.
- (7) H. G. Rawlinson (ed.), *A Voyage to Surat in the Year 1689*, London: Oxford University Press, 1929.
- (8) *Ibid.*, p. 115. なお、以下の本文中の数字については引用文の後に括弧を付け、ペーシ数のみを記すこととする。
- (9) 前掲『中世インドの歴史』三八五ペーシ。
- (10) Florence D'Souza, "Voyageurs européens au Gujarat au XVII^e Siècle", in *Sources européennes sur le Gujarat*, ed. by Ernestine Carreira, Paris: Société d'Histoire de l'Orient, L'Harmattan, 1998, pp. 185-210.
- (11) Meera Nanda, *European Travel Accounts during the Reigns of Shahjahan and Aurangzeb*, Delhi: Nirmal Book Agency, 1994, p. 9.
- (12) Alexander Hamilton 一六八九—一七二三年まで、インドをはじめ東南アジアや中国、さらには東アフリカの海岸部まで、広く東方世界を旅した。東インド会社の社員であったが、解雇され、個人貿易を行ったり、雇われ船長として働いた。その長期にわたる波瀾万丈の体験は、『東インド新叙説』として一七二七年に出版されている。(次註参照)
- (13) Alexander Hamilton, *A New Account of the East Indies, with Numerous Maps & Illustrations*, ed. by William Foster, 2 vols., London: The Agronom Press, 1930, Vol. 1, pp. 87-88. また、インド人は一七〇〇—一七一七年に建造された第二の市壁をめぐって、詳細な記録を出している。
- (14) V. A. Janaki, *Some Aspects of the Historical Geography of Surat*, Geography Research Paper Series No7, Baroda: The Maharaia Sayajirao University of Baroda, 1974, facing to p. 88.
- (15) 市門をめぐっては以下のとおり。北向きの門：フリヤー門 (Variāv)；東向きの門：サイイヤン門 (Syed-pur)；トランハンバン記 (Burhanpur)；東向きの門：ナバサリ門 (Navasari)；マシヤナー門 (Majura)；西向きの門：メンカ記 (Mecca)；バダシャーコー門

(Badashahi)° cf. *Gujarat State Gazetteers: Surat District* (Revised Edition of Volume II of the Original *Gazetteer of the Bombay Presidency relating to Surat and Broach*) 1st edition, 1877, revised edition, Ahmedabad: Government Printing, 1962, p. 960.

- (16) 五つの船着場は以下のとおり。グジャラーチ橋 (Gujari Owara) もしくはミール・バフル水門 (Mir Behar Gate)° グジャラーチ橋 (Raja Owara) もしくは税関水門 (Custom-house, Water Gate)° ダッカ橋 (Dacca Gate)° ミナー水門 (Lati Gate) もしくはムッラー・ハダキー水門 (Mulla Khadaki Gate)° メッカ橋 (Mecca Bridge), cf. *Surat District*, p. 960.

- (17) Alexander Hamilton, *op. cit.*, p. 89.

- (18) Atlas (Atlas) はサナンの別名° Cuttaneは反物の名前であり、絹 もしくは絹と綿との混合織物である° Soofey (Soosie) はある種の絹織物を指す名称° Cutgarも織物の名称を指すと思われるが不詳° Allajar (Alleja) は五メートル程の長さの絹織物であり、両端もしくはどちらか一方の端に、波模様が入れられている° Taffatyは無地の絹織物° Zarbati (Zerbati) は金糸織物° Niggaanee (Niccane) は Nainsookのジャズ、良質のキャリコの一種を指す° Scrutoreとくは不詳° (cf. Henry Yule and A. C. Bunnell, *A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases*, *Hobson-Jobson*, 1886, 2nd ed. by William Crooke, Surrey:

Curzon Press, 1985.)

- (19) 長島弘「一六世紀インド海上貿易の構造―主要貿易品の分析を中心として」『東洋史研究』第三五巻第二号、一九七六年。

- (20) 商業についての記述は、近藤治「ムガル朝インドの商品流通」(木村尚三郎等編『中世の都市』中世史講座三) 学生社、一九八二年を参照。

- (21) 前掲「ムガル朝インドの商品流通」三〇八頁。また、Ashin Das Gupta, *Indian Merchants and the Decline of Surat c. 1700-1750*, Wiesbaden, 1979, p. 24. スーラトの権力者は、この二人の他に、スーラトの艦隊を指揮したジャンジラのシーディーという人物がいた。アミン・ダス・グプタによれば、シーディーは行政には関わりを持たなかったものの、これら三職の役人がスーラトの支配者であったようだ° cf. Ashin Das Gupta, *ibid.*, p. 26.

- (22) *Ibid.*, p. 24.

- (23) *Ibid.*, p. 25.

- (24) *Ibid.*, pp. 27-28.

- (25) 前掲『中世インドの歴史』二四九〜二五一ページ。

- (26) フォウシュタルとくは、Noman Ahmad Siddiqi, "The Faujdar and Faujdari under the Mughals", in *The Mughal State 1526-1750*, ed. by Muzaffar Alam and Sanjay Subrahmanyam, Delhi: Oxford University Press, 1998, pp. 234-251を参照。

- (27) Ashin Das Gupta, *op. cit.*, p. 28.
 (28) バニヤは、ヒンドゥー教徒、シャイナ教徒から構成される商業に従事するカーストの名称である。オーヴィングトンの記録に見られるように、当時のヨーロッパ人はバニヤを広くヒンドゥー教徒を指す名称として使うことがあった。しかし、通常には商人を指す名称として使われることが多い。ガウルは、ペルシヤ語ガウル (gaur) に由来することは、拜火教徒を指す。ペルシヤ語ではガブル (gabr) ともいう。
- (29) カバヤは、アラビア語の qaba (衣服) に由来する。
 (30) *Hobson-Jobson*, p. 137.
 (31) 前掲「イギリス人のインドへの旅—オーヴィングトンのスーラト訪問と喫茶擁護論—」を参照。
 (32) *Hobson-Jobson*, p. 36.
 (33) Michelguglielmo Torri, "Surat, its Hinterland and its Trade, c. 1740—1800, the British Documents", in *Sources Européennes sur le Gujarat*, pp. 35—56.

〔付記〕 本稿は一九九九年提出の修士論文を加筆・修正したものである。本稿作成にあたり、佛教大学文学部近藤治教授から、多くのご指導・ご叱正を賜りましたことを、ここに深く感謝いたします。